〔大猷院殿御實紀三十四〕寛永十四年四月五日、二丸の御宮經營せらるゝ地にならせ給ひしに、雙鶴雲中より舞降り、その地にとゞまり、しばらくして東をさして飛さりしかば、御感なゝめならず、大僧正天海祝詞を奉り、澤庵は頌幷序を獻じ、烏丸大納言光廣卿も折ふし在府ありければ、國字の記幷和歌二首を詠じて奉らる、また儒臣林道春信勝に命せられ、その記をつくらしめらる、

〔一話一言十三〕鶴郡鶴羽記

鶴郡屬峽中、乃在富士嶽之北、當初人王第七世孝靈帝七十二年、秦始皇遣徐福、發童男女數十人、入海求仙、其所謂蓬萊者、蓋吾富士嶽是也、徐福既至、而知秦之將亂也、留而不歸、遂死于此矣、後有三鶴、蓋福等魂之所化云、其鶴常在於郡、故名焉、郡分上下二鄕、上者曰大原庄、下者曰羽置庄、又有九山八湖、皆仙境也、元祿十一年春三月二十九日、一鶴死於大原、吉田村之民以白官、官遣川井渡部二吏檢看之、以其肉及兩翼獻東都、葬其骨於村之福源寺、諡曰淨鶴、客歲寛政甲寅春三月、雙鶴下吉田村、自以背拔羽、翩々乎如白蓮之墜落、犬群吠之、人集觀之、則聯翩冲天去、而不復下、後遍求諸九山八湖之間、遂失其所在、蓋登仙去耳、今歲乙卯春正月、州之等力村萬福寺主得其一羽、以珍之、請之記、予聞、晉太元中、武陵漁者入桃源、逢避秦人、傳以爲奇事也、然而重往、則遂迷不復得、亦蕉鹿之夢哉、今秦人之所化鶴、亦雖既登仙去而不可復見、其羽依然而存、則實是奇事、實是奇物、豈可不診焉乎、豈可不記焉乎、

寛政乙卯夏六月甲辰　　黑浦靈松龍鱗菴義端撰

右ノ記及羽甲州等力（トヾロキ）村萬福寺主三車上人携來

〔夫木和歌抄十四菊〕家集中宮御歌合、翫菊といふことを、　　權大納言長家卿

雲のうへにきくほりうへてかひのくにつるのこほりをうつしてぞみる

此歌注云、風土記に甲斐國鶴郡有菊花山、流水洗菊、飲其水人、壽如鶴云々、